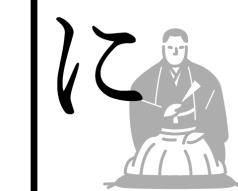


古 典 落 語 に 学



ぶ



立川談四樓

落語家

たけのこ

第四十八回 箕

あ

る隣り合わせに住む武家屋敷での話です。

「これ、今日のオカズは何じゃ？」

「は、筍でございます」

「ほう、もうそんな季節か。竹冠に旬しゅんと書いて筍という文字

はできた。してその筍は到来物いたきものか」

「いえ、到来物ではございません」

「では八百屋で買い求めたものか」

「いえ、買い求めてもおりません」

「到来物でもなく、買い求めていないものがなぜ我が家にあ

るのじゃ」

「実はご隣家の筍がこちらの庭に出てきましたのを、掘り出しだものでござります」

「何と！ 古来『渴しても盗泉の水を飲まず』と言うではないか。何ということをいたすのじゃ」

一 応咎め立てたものの、実はこの武士、筍が大好物。

「隣家へ行つてこう言いなさい。『不埒ふらちにもご当家の筍

が我が家の庭に忍び込みました。戦国の世ならば間者かんじやも同様、

召し取つて無礼千万と手討ちにいたします。そのお断りに参りました」と——。ワシは鰯かづお節のダシを取つて待つておる

家来は隣家へ行つて言われた通りの口上を述べる。

「相分かった。不届き至極な我が筈、いくら泰平な世とは言え、

お手討ちにされるはやむなきこと。やむなきこととは言いながら、しかしそれで遣骸はこちらへ是非お下げ渡しを願いたい」

「あの、うちの旦那は鰹節のダシを取っているのですが」

「そうか、お下げ渡しはダシ諸ともでも一向に苦しゆうないぞ」

つた家来はこう言われたと話す。

「ほう、遺骸を引き渡せとな。ダシ諸ともでも苦しゆ

うないときたか。なかなか言うではないか。敵もさるものじや。ではもう一度隣家へ行って参れ。で、こう言いなさい。『不埒な筈めはすでに当方にて手討ちにいたしました。遣骸は当方に

て手厚く、腹のうちに葬り、骨は明朝、高野（廁）に納まるごとございましょう。これはその筈の形見でござります』と言つて、この筈の皮をバラまいてきなさい」

家来はまた隣家にやってくる。

「おお、遺骸とともに鰹のダシも持つて参ったか？」

「いえ、違いますんで。これは筈の形見でござります。お受け取りください」

そう言うと、家来は筈の皮をバラバラバラーッとまいた。

「うーむ、間に合わなんだ。最早お手討ちになつたか。おお可哀や、かわ（皮）いや（嫌）」

れが『筈』という落語です。筈の出回る季節に合わせ、

春によく演じられます。『長屋の花見』などの桜の嘶

がいくつかありますが、その少し後ぐらいの時期でしょうか。

上方落語で、人間国宝であった桂米朝師匠がこのネタをよくやつていました。それが広まり、今では東京の落語家も手がけます。都市の性格上、上方落語には武士はあまり登場しません。商人は大勢出できますが。

武士はやはり江戸に似合います。ですからここでは舞台を上方から江戸に置き換えました。ただし、武士とは言えど、刀は抜きません。この『筈』では洒脱な会話の応酬が眼目です。何しろモノが庭から顔を出した筈ですから、大喧嘩になるはずもなく、何度も隣家との間を往復させられる家来こそ氣の毒ですが、武士二人共に会話を明らかに楽しんでいます。

たわいのない落語らしいオチです。可哀や、かわ（皮）いや（嫌）ですから。このオチが嘶の味わいを軽妙にしていると言えるでしょう。筈は煮ても焼いても美味いですよね。鮮度のいい刺し身もたまりません。

さてこの春、あなたはもう筈を食べましたか。